

★栄光の表彰式

3000mSCの表彰式が始まった。レース前と異なり、みな「やり切った感」の表情。長距離種目は古豪が圧倒的に強い。都大路を走りたい選手たちは入学時点での意識も違うし、その後のチームの練習環境も全く異なる。速い子はより速いチームで練習する。したがってインターハイ決勝に、駅伝古豪以外入り込む隙間はないのだ。そういった可能性を考えると、秋庭先生・青木チームの成し遂げた結果は驚異的である。



表彰式でも青木の笑顔は晴れやかだった。

★総体に参加できる幸せ

インターハイ決勝後のベンチは祝いの電話や来客でにぎわう。

青木も「遠いところを応援に来て下さりありがとうございました」と、高校生らしい挨拶をしてくれて微笑ましかった。



途中で山崎一彦先生に会った。「春高すごいじゃないですか」とお言葉をいただいた。

私は10年以上お会いしていなかったが、連盟強化育成部長の要職に就いていらっしゃる、全中、インターハイ解説などはお馴染みである。日本の400mH時代を開拓した世界陸上ファイナリストである。山崎先生の郷土埼玉への愛情は深く、いつも埼玉の選手を厚く見守っているのは有名な話。



私と石上はベンチの湧いている余韻を後に、会場を去った。足取りも軽く、達成感があった。2006年大阪インターハイの時のように、新大阪で祝杯をあげた。運動部のOBとしてこれほどの幸せがあるだろうか。後輩選手が全国で戦い、その応援にオフィシャルであるOB会として参加できるのだ。そういう環境を作ってくれている先輩や親御さん、現場のみなさまに改めて感謝しなければならぬと痛感した。現役～OB時代を含めて、インターハイというものに行ったことも見たこともない人が日本中ではほとんどなのだから。



甲子園番組で往年のスター荒木大輔選手が語っていた。「甲子園で優勝できるのは1校しかない。それ以外はみな負けるのだ。だから全国大会は負けて当たり前。」

中学までは一発記録を出せば全中出場となる。しかし、インターハイは各県内での試合でラウンドを重ねていかなければ出場に行き着けない。高校の試合は県大会以降はどれも競争は激しい。悠々通過などない。したがって好記録を保持していても権利獲得の試合で7位以降に涙する選手を星の数ほど見てきた。努力、環境と運、そして才能のすべてが揃っていないと全国の決勝舞台には立てない。



確率を考えたら気が遠くなるほどである事を少なくとも我々OBは知っている。だからこの偉業を讃えたいし誇りに思う。

★青木の背中を見て

春陸でのインターハイ入賞は9年ぶり。しかも今回は不可能に近いと言われた長距離種目。後輩たちはこの結果をどう受け止めるか。とはいえスポーツ優遇入学はないので、入賞がそう簡単に続くこともないのだが、ここ数年、春陸記録は800m～5000m、競歩まですべて更新してみせた。正しいトレーニングを重ねていけるという証明である。これは大きな意識高揚につながるであろう。3年間がんばったらもしかして…という「インターハイへの可能性」に夢を膨らませ、春陸時代を謳歌してほしい。

全国津々浦々の学校が隣り合うベンチ。強豪校の数十人部隊もあれば、顧問と一人だけの小さなテントもある。

この光景はインターハイ独特のもの。特に最終日は帰り支度を始めたり、みな記念写真を撮ったりとにぎやかである。

こうした風景は30年前も変わらなかった(あ、デジカメはなかったから、友人同士は手紙の交換だったなあ…)

こうして2015年の高校生の夏は終わっていった。



筆 37回 野本

